
“食といのち” ～ 食べるということ ～



東口 高志

藤田保健衛生大学医学部外科・緩和医療学講座 教授

略歴

1981年： 三重大学医学部卒業
1981年： 三重大学医学部第一外科入局
1987年： 三重大学大学院医学研究科修了（医学博士号 取得）
1987年： 三重大学医学部第一外科助手
1990年： 米国オハイオ州シンシナティー大学外科学講座 (J.E.Fischer教授)
Research fellow
1994年： 三重大学医学部第一外科 講師
1996年： 厚生連鈴鹿中央総合病院 外科医長
2000年： 尾鷲総合病院 外科・手術室部長
2003年： 尾鷲総合病院 副院長・外科部長
2003年： 藤田保健衛生大学医学部 外科・緩和医療学講座 教授
2009年： 藤田保健衛生大学七栗サナトリウム副院長(兼任)
2010年： 藤田保健衛生大学第一教育病院緩和ケアセンター長(兼任)
2012年： 藤田保健衛生大学第一教育病院食養部部長 (兼任)



食はいのち（命）の源であることは誰もが知っていることだが、あまりにも当たり前すぎることから、時にはその大切さや尊さを見失ってしまうことがある。しかし、何らかの疾病に罹患した際や外傷で命の危険が危惧された瞬間に、その大切さを痛感させられる。食といのちは実に切っても切れない間柄にある。もちろん食はエネルギー供給という意味では、すべての生きとし生ける物にとって大切な生命を紡ぐ営みである。また、食は単なる生命維持だけでなく、いきいきと生きるために必要であり、喜びも悲しみもまた苦しみも実は食、すなわち栄養が満たされていないと人間（ひと）らしく感じるができなくなる。要するに、いかなる理由であろうとも食が機能しないと人間は生物的な、かつ人間的な活動が制限され、かつ長期的にわたって栄養補給がない状態では必ず死に至る。

最近、最も良く遭遇する食といのちのつながりを確認あるいは感じさせられる場面は、やはり年々増加するがん患者さんの医療、あるいは脳血管障害や廃用症候群を併発した高齢者医療に携わっているときであろう。すなわち、がんによる死亡は、年間 30 万人を越え、現在わが国の死因の第一位を占めており、今後も増加の一途を辿る。2006 年 6 月、わが国で初めて緩和ケアに関する条文が盛り込まれた法律「がん対策基本法」が制定され、その基本理念には、①がんに対する研究の推進、②がん医療の均てん化の促進、③がん患者の意向を十分に尊重したがん医療提供体制の整備などが盛り込まれた。このようにがん医療体制の早急な構築が必須の現況の中で、最も重視すべきことは、がん患者に対する全人的医療の確立である。特に、身体に直接侵襲を加える医療である外科治

療や化学療法、放射線療法においては、同時に侵襲から生体を守るという矛盾した医療を展開せねばならない。すなわち、生体侵襲を伴う積極的な治療はもちろんのこと、根治的治療が困難ながん患者であろうともがん以外の健全な生体機能の維持・向上に努め、精神的ケアにも十分な配慮を行って、身体（からだ）と精神（こころ）にも優しいがん治療を、早期から開始することが肝要である。そのためには緩和ケアを含むがん治療に関係するすべての医療と、既にわが国の医療に浸透している栄養サポートチーム（NST）との有機的なコラボレーションが有効である。

一方、わが国の人口動態をみると現在の病院を主体とする医療体制では決して十分とは言えない。すなわち、わが国の2010年の推定死亡者数はおよそ120万人であるが、20～30年後には170万人に膨れ上がる。これに対してわが国の病床数は減少の一途をたどっている。要するに『50万人の患者の命』が路頭に迷うことになる。このような将来の危惧すべき事態に対する対策のひとつが適正栄養管理の普及である。すなわち、栄養管理を駆使した社会福祉体制を如何に早く構築するかが重点課題となる。その意味で診療報酬とし

ての「栄養管理実施加算」や「NST加算」はその大きな問題点を解決する第一歩であり、決してこの灯を消してはならず、この期にわが国の栄養管理を基盤とした医療体制を確立させることが必要である。

したがって、将来のわが国の医療および福祉の方向は、①患者中心の医療、②チーム医療、③高齢者医療や福祉の確立、④地域連携の重視、⑤医療費削減に集約される。それを達成するためには、『食べて治す、食べて癒す』をキーワードとする病院自宅化および自宅病院化プロジェクト（在宅・訪問看護・長期療養施設・回復期施設・病院医療の一本化）が必須であり、そのためにはまず、わが国の市民、国民、なかでも特に高齢者を中心に“食力”を如何に維持し、改善させるかが大切である。すなわち、この“食力”を重視した医療の展開こそが、食といのちを紡ぐ将来の重要な政策であると思われる。

本シンポジウムでは、この“食力”の維持・改善対策と、食べて治す、食べて癒すプロジェクトを中心としてお話を進め、「食といのち」について皆様とともに考えてみたいと思う。